

帯富で採集したヒメキマダラヒカゲ

円子 紳一

1976年8月15日、浦幌町字帯富(元木氏宅付近)でヒメキマダラヒカゲ——*Harima callipteris* Butler——を1頭採集したが、浦幌町内においてはまだ記録されていないのでここに報告する。

15-VIII-1976. 1 十勝郡浦幌町字帯富

本種は日本を原産地とし、国外では樺太および中国南部のみに分布している。北海道においては低山地帯から高地帯まで広く分布するが、北海道より南下するにつれて山地性の種となる。分布の南限は熊本県市房山付近。

種名 *Callipteris* とは「美しい翅」の意味であり、その色彩は明るい。

(浦幌町農業 協同、組合農産課)



参 考 文 献

白水 隆 (1971) 原色図鑑日本の蝶

横山光夫・若林守男 (1969) 原色日本蝶類図鑑

松本尚志 (1975) 浦幌町に於ける蝶類の分布、浦幌町郷土博物館報告 6

地域における考古学研究への提言

杉 浦 重 信

この数年来の異常とも言うべき考古資料の爆発的氾濫のもとで、考古学研究の根本問題は、蓄積された莫大な資料を総合・理論化して、人間の歴史を叙述することであろう。所謂、「考古資料の史料化」を目指した方法論の構築である。神話教育・紀元節の復活や埋蔵文化財の大量破壊という反動的な政治攻勢の中で、これらを打破する科学的な・実証的な歴史の叙述は、考古学研究者に果せられた歴史的使命と言っても過言ではあるまい。

この課題は、数々の試行錯誤を繰り返しながらも、日本考古学の根幹の問題として取り組まれてきたし、今日、セトルメント・範型・領域・生活圏……など新しい視点で論議されているところである。これらの方法論の是非は別の機会に譲るとして、総じて理論が先行してしまい実証が不充分であると言えよう。理論と実証の間に横たわる

溝を埋める作業がなされないかぎり、当然のことながら、いくら高度に理論化された方法論であっても試論の域を出ることはできないのである。筆者は、理論先行型の実証性の乏しい方法論は、地域における考古学研究のあり方を変革しなければ解消できないと考えている。ましてや盛んに叫ばれている「考古学研究の停滞」は到底克服できないであろう。

総合化を図るためには、必然的にその研究対象が点から面へと拡大して行かざるを得ないのである。また、研究対象の拡大から派生してくる生態系、地理的環境、季節性など多角的な分析が要請されよう。それに加えて、莫大な考古資料の蓄積という現状では、個人研究は資料蒐集の段階ですでに一定の限界を想定しなければならないのである。筆者ばかりではなく、総合化の作業を推し進めようとする時、だれしもがこの限界を痛感し

ているのではないだろうか。総合化による研究対象の拡大に対応できる研究体制を確立しないかぎり、理論はあくまで理論にすぎないのであり、実証性に欠けざるを得ないのである。筆者は、理論と実践の溝を埋めて考古学の歴史叙述を可能にする唯一の手段は、従来の個人的・個別実証主義的な研究から脱皮して統一的なテーマ設定をもった組織的な地域研究の実践以外にないのではないかと思うのである。今まさに、考古学研究は、その中心を組織化された地域研究に移行しなければならぬ段階である。

こうした意味で、北海道の各地で河川という地形単位で考古学研究組織（釧路川、常呂川、十勝川等）が結成されているが（その機能を十分に発散しているとは言い難い）歓迎すべき傾向である。また、北海道大学北方文化研究施設の道北地方のオホーツク文化の解明に向けての長期に亘る組織的な研究体制が数多くの成果を生み出している点評価しなければならないであろう。北方文化研究施設のような統一的なテーマを設けた組織的な地域研究が、恒常的に実践され、しかもその地域やその組織内で完結するような小規模の古い研究体制でなく、各地域の研究組織間の積極的な交流が活発化することこそ、理論と実証の溝を埋める作業の前提条件である。と同時に、オホーツク文化がそうであったように未解決のまま放棄されている諸問題も徐々に解明されるであろう。そして、各地域での組織的な研究が進展するにつれて、年1回の機関誌発行と総会・研究発表の鈍化した活動に低迷している道内最大の研究組織である北海道考古学会に活気を与えて、本来なされるべき中核的な機能を回復するであろう。また、この数年間の考古学の専門化に伴って、自己の研究活動の場を失ったアマチュアの研究者の地域研究への参加が期待されよう。多くのアマチュア研究者の参加は、遺跡が考古学専業者に独占されている現体制からの脱出の第一歩であるとともに、幅広い地域的連帯をもった定着性のある研究を約束してくれるにちがいない。

組織的な地域研究によって（様々な試みを経て方法論の理論淘汰がなされるであろうが）社会を構成する基本的な単位集団としての共同体の実像が各地域ごとに把握されるなかで歴史を動かしてきた人間集団の歴史が必ずや抽出できうるであらう。

う。

しかし、地域研究を実践する際の障害を見逃すことができない。この障害とは言うまでもなく緊急発掘である。緊急発掘が現在のような速度で進行するならば、近い将来、遺跡は一握りの……指定を除いて（静岡県浜松市の伊場遺跡のように一度指定された遺跡が解除される場合もあり楽観視できないが）破壊し尽されるであろうし、資料の蒐集・把握・分析は個人はもとより、組織においても不能になるであろう。おそらく、コンピューターの処理に頼らざるを得ないのではないかと憂慮されるのである。また、地域の研究者自身が加速度的に増加する緊急発掘に追いまわされて、自己の研究に精力を投入できない現状も深刻である。北海道でも、緊急発掘の増加による地域研究の空洞化現象が顕著になるにおよんで、研究者の危機意識がしだいに高揚し始めたのである。このような背景から、北海道考古学第10輯に「北海道の埋蔵文化財の危機」と題した特集が企画されるに至ったのである。この特集の中で地域の実状が吐露されて、すでに3年が経過してしまっただが、埋蔵文化財の保存運動は皆無に等しく、好転のきざしすらうかがわれないのである。実態はかえって一層深刻さを増したかに見えるのである。北海道考古学の特集を単にぐちのこぼし合いに終らせてよいであろうか。残念を超越して、報告者自身が体制の枠組みの中での無力感から文化財保護運動を推進する意欲を喪失してしまっただのではないかという不安感すら感じられるのである。この危機を乗り越えるには、先に述べた地域組織を母体とした市民運動の一環としての埋蔵文化財の保存運動の実践とその強化であろう。

今日、考古学研究の基盤は地域研究であり、それは統一的なテーマ設定をもった組織的な研究と埋蔵文化財の保存運動の二本立であらねばならないのである。

（付記）

誤解のないよう明記しておくが、筆者は個人研究を否定して、すべて組織的な研究（共同研究）に移行すべきであるとは考えていない。本文中で述べたが個人研究には、新しい研究動向に対応できない限界性があり、総合化を図るためには、マニファクチャ以前の独立小生産的な研究より組織

的な地域研究のほうがはるかに有効であろうと述べたまでである。おうおうにして、組織的な研究は、その構成員を歯車化させる仕組みになりがちであり、当然の帰結として官僚主義に陥らざるをえないものである。この弊害を除去するには、不断の個人研究の止揚をおいて他にあるまい。

若輩を顧みず、大言壮語した点地域研究に向け

ての若い熱意と御了解いただいで御許し願いたい。筆者自身、地域研究の明確な理論を確立できていない状況であり、文中には未熟さとあいまって、論証の不正確な具体性に欠ける記述や論理の矛盾あるいは誤認など数多くあると思われる。先学諸氏の御批判・御叱正を賜わりたく思う次第である。

(富良野市郷土館学芸員)

鹿追町No.27(北鹿追野尻)

遺跡出土の両頭石槍

佐藤訓敏

I

ここに紹介するのは、河東郡鹿追町No.27(北鹿追野尻)遺跡発見の両頭石槍である。鹿追町教育委員会・鹿追町考古学研究会は、町内に所在する埋蔵文化財の分布調査を1975年10月、1976年3月の2回にわたって実施した。本資料は、その際に

発見されたものである。

すなわち、1976年3月25日高野保昌・菅訓章両氏と筆者が北鹿追北15線2番地在住の野尻西太郎氏宅において、遺跡の聞き取り調査を行った折、石斧・石核と共に本資料が見出されたのであった。その後、前述の分布調査に関しては『鹿追町の遺



第1図 両頭石槍出土地点 (Mark →)